心連心
Heart to Heart

日中交流×町おこし＠伊豆プログラム 2013
心連心卒業生×日中学生交流連盟

活動報告書

はじめに

私たちは以前、国際交流基金日中交流センターの実施する「心連心：中国高校生長期招へい事業」に参加し、日本で約１年間の高校生活を送りました。辛いこともありましたが、日本にも家族や友達ができ、人としても成長することができました。そんな私たちのような“心連心卒業生”は２０１３年８月までに第一期生から第七期生、合計２３７名に達しました。そのうち、約４割が日本の大学に進学しています。

２０１２年１１月、日中国交正常化４０周年の節目の年でありながら、日本と中国の関係がこれまでにないほど冷え込む中、国際交流基金日中交流センターが、心連心卒業生と日中関係に関心のある大学生を集め、学生に何ができるかをテーマに討論会を開催しました。そこでは、私たち大学生が中心となって、これまでの“交流のための交流”を越えた、より多様な人々を巻き込むことのできる“共通の課題に一緒に取り組む活動”へのシフトが必要だという意見をまとめました。その具体的なアイデアの一つとして、都市部の中国人留学生を地方に送り、「町おこし」について一緒に考えようという企画が、今回、注目を集めました。そして、翌年夏のイベント実施を目標に、私たちは「日中交流×町おこし＠伊豆プログラム 2013　実行委員会」を立ち上げたのです。

Contents

2 はじめに
4 事業概要
5 事前準備
6 活動の内容
11 参加者の感想
14 写真コンテスト
15 おわりに

国際交流基金日中交流センターとは

独立行政法人国際交流基金は日本の国際文化交流事業を総合的に実施する専門機関です。１９７２年に外務省所管の特殊法人として設立され、２００３年１０月に独立行政法人となりました。現在、本部と京都支部、２つの付属機関（日本語国際センター、関西国際センター）、および海外２１カ国に開設された２２の海外拠点をベースに、外部団体とも連携しつつ、文化芸術交流、海外における日本語教育、日本研究・知的交流を３本の柱として活動しています。

日中交流センターは、日中間の青少年交流を促進するため、２００６年４月に国際交流基金本部内に設置されました。主に３つの事業――次世代を担う中国の高校生を日本へ招へいする事業、日中交流の担い手間のネットワークをつくり、広げていく事業、中国の地方都市を中心に、日本の文化を伝えるとともに、交流を現地で行う「ふれあいの場」の設置・運営を行う事業――を推進しています。

※本事業では“心と心をつなぐ”をモットーに、「心連心」というプログラム名称を用いています。

JAPANFOUNDATION 国際交流基金 日中交流センター　心連心 Heart to Heart

日中学生交流連盟（Japan China Student Frontier Group）

日中学生交流連盟は２０１２年１１月に設立されました。現在は「ＯＶＡＬ」「ＷＥ」「京英会」「京論壇」「心連心ＯＢ・ＯＧ会」「日中学生会議」「日本青少年中国語友の会」「ｆｒｅｅｂｉｒｄ」「ＬＥＡＦ」（５０音順）の９つの団体が加盟しています。我々の目的は、交流会や勉強会を通して相互理解を深め、「日中新時代を切り開くコミュニティ」を構築することです。両国の大学生の交流は、これまでにも政府や大学、あるいはNPOや学生団体主催で数多く行われてきましたが、太いパイプの構築が難しいという課題がありました。そこで、JCSFGは各団体の連携の充実を図り、各々の団体が築いてきた日中のパイプを結集し、日中両国学生間の交流活動をより大きな流れにしていきたいと考えています。

JCSF 共に、挑む。 日中学生交流連盟 Japan China Student Frontier Group

JCSFG 加盟団体

京論壇　日中学生会議　日中交流団体 WE　京英会

LEAF　OVAL　free bird　日本青少年中国語友の会

事業概要

開催概要

日　時：２０１３年７月３１日～８月２日
開催地：静岡県伊豆市
主　催：日中交流×町おこし@伊豆プログラム 2013　実行委員会
共　催：日中学生交流連盟
参加者：３２名（男性：１５名　女性：１７名）
協　力：国際交流基金日中交流センター

目的

❶：日中の若者が「町おこし」というテーマを通じて協働し、交流を深める。
❷：日中の若者が現地の人々と幅広く触れ合い、外からの目線、特に留学生の目線で伊豆の良さを発見し、発信する。

事前準備

どこで、何をやるか

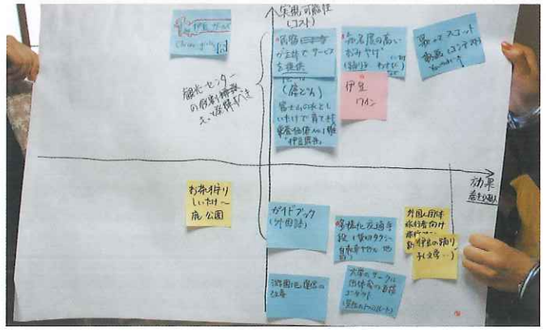
これまでのような“交流のための交流”ではなく、日中の学生が共通の課題に一緒に取り組むこと。その一つの案として選ばれたのが「町おこし」でした。しかし、実行委員会を立ち上げ、ミーティングが行われると、すぐに大きな壁にぶつかります。どこで、何をやるか。実際、地域活性化の取り組みは、専門家にとっても容易ではありません。素人の学生に、何ができると言うのでしょうか。この問いに答えは出ません。「じゃあ、とりあえず見に行こう」。幸い、そうした活動の経験者との繋がりがありました。こうして、私たち実行委員は、「町おこし」について学び、活動のアイデアを考えるため、２泊３日の伊豆下見ツアーに出かけました。

伊豆下見ツアー

伊豆を拠点に地域プロモーション事業などを手掛けている株式会社 toiz は大学生が起業した会社。活動内容も年齢も近いということで、今回の下見ツアーを全面的にサポートしてくださいました。滞在中、伊豆の活性化に取り組む株式会社ワーキング・ヘッズ・アドバンス代表取締役の桜田賢介さんや、NPO サプライズ代表理事の飯倉清太さんにお話しを伺い、伊豆市が直面している課題やその解決方法について、中国人留学生という立場をどう活かすかも含め、何度も議論しました。「伊豆の経済は観光業で支えられている。日本人客が減っている中、日本在住の中国人 76 万人が潜在客となる。『伊豆の踊り子』で伊豆は既に中国でも知名度が高い。今後どうすればより多くの中国人を伊豆に呼び込むことができるか、一緒に考えてほしい」と語る飯倉さんの言葉には、留学生に対する期待が感じられました。

私たちにできることを

下見ツアーの最終日、アイデアの発表会を行いました。実際に地域活性化に取り組む方々のお話に触発され、様々な意見が飛び交いました。新しい名物を作ろう。ゆるキャラを出そう。しかし、大切なことはアイデアの奇抜さではないことに気が付きました。私たちにできること。それはまず何よりも伊豆を楽しむこと。地元の人たちと交流する。日中の学生が伊豆を舞台に交流する。それを最高に楽しい思い出にすること。そうして、「伊豆、楽しかった！」とみんなが口々に呟けば、それも一つの「町おこし」になるのではないでしょうか。夏の本番に向けて、私たちはミーティングを重ね、最高の伊豆の思い出のために、準備に励みました。



何度集まって活動のイベントのキャッチフレーズも一般参加者の案を募ってコンテスト形式で決めました。

活動の内容

場　所：静岡県伊豆市
人　口：約３万４千人
面　積：363km2
主要産業：観光業、農業など

今回の活動では、事前準備で学んだことを活かし、参加者と地元の人々ふれあえること、伊豆の魅力が充分に味わえること、そして、それらを通じて日本人と中国人が同じテーマについて語り合い、互いの意見をぶつけ合いながら交流できることを意識的に盛り込みながらプログラムを組みました。

活動スケジュール

	一日目（7月31日）	二日目（8月1日）	三日目（8月2日）
午前	新宿集合、バス移動 オリエンテーション ▼	**伊豆の文化体験** **わさび漬け作り** ▼	**メッセージボード作成** ▼
午後	**ワイナリー見学** 地元企業の現状について伺う。 ▼	**浴衣 de 散策 @ 修善寺** 地元の方々に伊豆の魅力を伺う。 **盆踊り大会** ▼	**伊豆市役所訪問** 地域活性化に関する講義を聞く。 メッセージボード寄贈 ▼
夜	**ワークショップ①** 班毎に伊豆の特色について話し合う。翌日の散策の計画を練る。	**ワークショップ②** 班毎に、散策で見つけてきた伊豆の魅力をプレゼン。	バス移動 解散

7/31（水）

中伊豆ワイナリー シャトー T.S 見学

中国のブランドと勘違いされるほど中国人に馴染みのあるぶどうの品種「巨峰」。私たちはその原産地、中伊豆のワイナリーを見学しました。「中伊豆ワイナリーヒルズ」はワインの生産販売だけでなく、ホテルやスポーツ施設、結婚式場も手掛ける複合リゾート施設。本来はホテルの宿泊客向けのサービスであるワイナリーガイドツアーを、「若いみなさん、特に学生のみなさんに、ぜひ伊豆のワインに興味を持ってほしい」とのことで、特別に案内していただいた。参加者の中には、ワイン初挑戦だった人もいれば、根っからのワイン好きもいた。ワインの飲み方講座も開いていただき、その後の試飲会でもワインの話題で盛り上がった。

夕食は宿の前で BBQ！あっという間にうちとけました。

正しいワインの飲み方を教えていただきました。

ワイナリーの方の案内でぶどう園を見学。

スタッフさんとみんなで集合写真。

議論は夜遅くまで続きました。

地域活性化ディスカッション

NPO サプライズ社の代表理事である飯倉清太さんから、観光客が減りつつある伊豆の現状を学びました。飯倉さんの問いかけに沿う形で、私たちは、どうすればより多くの若者に伊豆の魅力を伝え、伊豆に足を運んでもらうことができるのかを議論しました。

8/1（木）

天城わさびの里　わさび漬け体験

わさび漬け職人、とても元気でかわいいおばあちゃんたちは「若い人が来てくれてほんとにうれしいわ。自分もちょっと若返りできたわよ」、「伊豆、いいでしょう。今度来たらおばあちゃんのうちにおいでね」と言ってくださった。やはり、ある場所が恋しいのは、そこで出会った人が恋しいからなのだと思います。地元の方々とのふれあいは、その土地の魅力を感じるための、最も有効な手段ではないでしょうか。

伊豆で日中交流活動とは珍しいとのことでお誘いを受け、地元の FM に緊急出演しました。

浴衣で修善寺散策

午後は浴衣を着て、修善寺の温泉街を散策しました。伊豆のいいところをたくさん見つけて発信するために、グループ毎に地元の方々から伊豆への想いを色々と伺いました。右の写真のおじいちゃんたちはトンボ作りの職人さんたち。最年長の方が今年 75 歳。耳が遠くなってきたそうだが、手先がとても器用で、まだまだ現役。近くでイベントがあると作った竹トンボを売りに行くそうです。

町の方々はとても親切。気さくにお話してくれました。

8/2（金）

修善寺盆踊り大会

盆踊りの踊り方は知らなかったけれど、ボランティアの先生の踊り方を真似しながら踊ってみました。暗かったおかげで恥ずかしさはあまり感じず、自分なりの踊り方で一生懸命に踊りました。ふと見渡してみると、私たちと同じぐらいの世代の人はほとんど見当たりません。幼稚園児くらいの幼い子供とその母親、そしておばあちゃんとおじいちゃんたちだけ。つまり、大学生や働き盛りの年代が非常に少ない。ある子供連れの比較的若い女性に、「今年は学生が多くてにぎやかだね。来てくれてありがとう」と言われ、少しは役に立てたかなと嬉しく思う反面、これがまさに日本の田舎が直面している問題なのだなあと感じ、複雑な気持ちがした。

伊豆市役所訪問・メッセージポスター寄贈

短い期間ではあったけれど、私たちを温かく受け入れてくださった伊豆の方々への感謝を込めて、参加者全員のメッセージをまとめました。日中の学生で作業を分担し、一枚のポスターが完成。出来上がったものを市役所の一番目立つところに飾っていただきました。

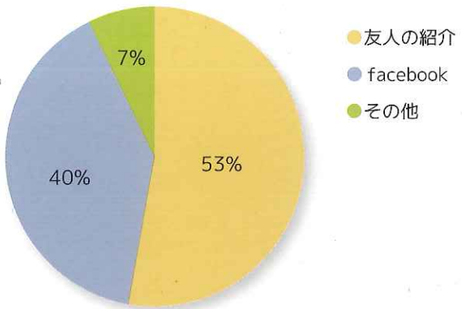
市役所では、伊豆市地域づくり課の山田和彦さんから、伊豆の現状とローカルラジオ FMIS についてお話を伺いました。

参加者感想

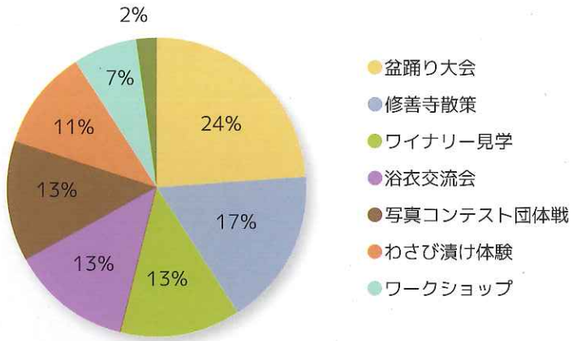
～アンケート調査～

今回の活動について、今後の活動が円滑に進めるためのヒントとして、参加者から意見を聞いてみました。

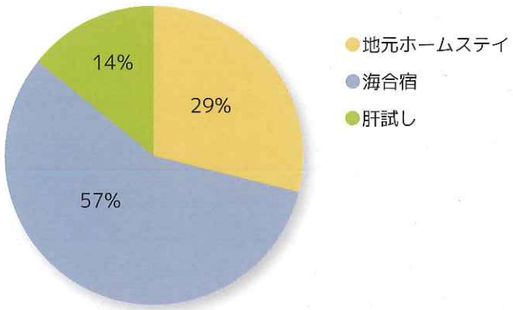
1 あなたは「日中交流×町おこし@伊豆 2013」をどこで知りましたか？



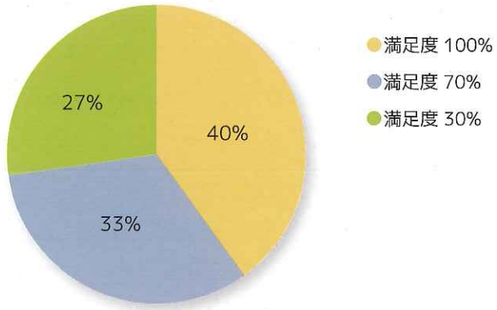
2 「日中交流×町おこし@伊豆 2013」のプログラムであなたが一番楽しかったと思ったのは？



3 もしあなたが「日中交流@×× 2014」を実施するとしたら、どんなプログラムを企画しますか？



4 総じて、「日中交流×町おこし@伊豆 2013」に参加して、満足できましたか？



よかった点

- 「遊び」と「勉強」の両方があって有意義でした。
- 伊豆は想像以上に深刻な問題を抱えていると実感した。
- 普段中国人との交流がないので、生の中国人と話ができたのはとても新鮮だった。
- 伊豆で古き良き日本を感じることができて良かったと思います。

足りない点

- グループワークの話し合いの時間がもっとあるといいと思いました。
- 市役所のラジオ局についてもう少し深く話すと面白そうです。

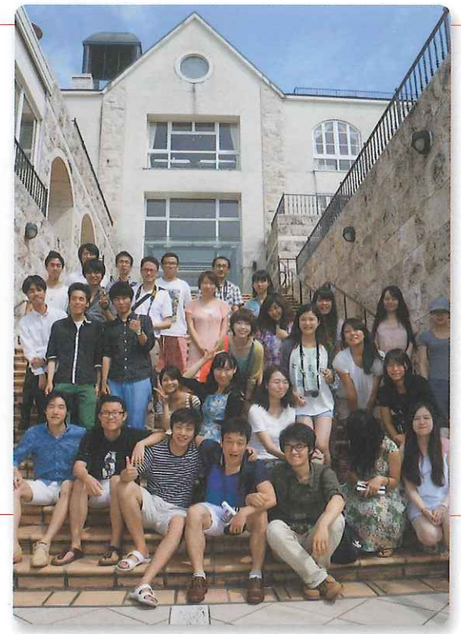
～参加者からのコメント～

▶ 森由香里

中国人の子たちと一緒に２泊３日を過ごした中で、色々な価値観などを交換しあうことができ、文字通りに国際交流が楽しめました。わさび漬けや盆踊りなど、私自身も今まで挑戦したことがないことも、とても貴重な経験となりました。そして、伊豆の美しい景色に癒されて、すごく感動しました。ありがとうございました。

▶ 劉彬潔

伊豆の緑と人々の優しさに癒されました。修禅寺で盆踊り大会に参加して、浴衣姿で可愛い現地の人々と一緒に踊った素敵な夜は一生忘れられません。伊豆に来て、本当によかったと思います。伊豆での全ての出会いに心から感謝します。また、伊豆のよりよい明日お祈りします。



▶ 齊藤勇希

古き良き温かい日本の美しさが見られて、本当に素敵な場所だと思います。特に、地元の人々のやさしさをよく感じました。またいつかわさびを食べに来たいと思います。

▶ 谷本 浩一

ワイナリー見学や温泉街散策など、二泊三日では見どころが多く、充実した活動でした。そして、伊豆の地元の人々の優しさをよく感じました。伊豆が大好きになりました。また機会を見つけて美しい伊豆に来たいと思います。

▶ 湯亜蘭

二泊三日の伊豆楽しめました。伊豆の人々がすごく優しいです。山もあり、海もありの伊豆で住みたくなりました。ワイナリー見学、わさび漬け体験、修禅寺での盆踊り大会など、すべて楽しかったです。最後に、二つ思ったことが有ります。一つはわさびのキャラクターがもっとたくさんのところで見かけると思ったのですが、それほどなかったので、ちょっと残念に思います。もう一つはわさびグルメ以外もっと気軽に楽しめるグルメを開発してほしいと思います。もっとたくさんの人々が伊豆に来るように期待しています。

▶ 劉露

川端康成の「伊豆の踊り子」で初めて伊豆という地名を知るようになりました。その時から伊豆は憧れのところになりました。実際にやってくると、想像以上に美しいでした。伊豆に来て本当によかったです。人生初めての盆踊りも楽しかったです。ぜひ今後友達を連れてまた来たいと思います。ありがとうございます。

～実行委員の想い～

張亜新
（心連心卒業生　東京大学）

たった二泊三日の旅でしたが、みんながゼロからスタートして、半年ぐらいささやかなところまで事前準備をして、うまくやり遂げたのは本当にありがたいと思います。最初はぼんやりしたイメージしかなくて、３０近くのイベントから私達が求めるいくつかの要素が含まれるかを熟考した上、日程や人数などに関する交渉を始め、たびたび交渉が順調に行かなかった時が出たりして、また直前でも浴衣の手配が厳しくなったりして、本当に実行委員会のみんなはよく協力して頑張ったと思います。また、国際交流基金の関係者の方々、株式会社 toiz の方々、伊豆市市役所地域活性化推進課の方々、今まで色々とお世話になりまして、心から感謝の気持ちを申し上げます。今後もよろしくお願いいたします。

皇甫丹婷
（心連心卒業生　東京大学）

今年の二月の下見ツアーから本番の「日中交流×町おこし@伊豆」まで、ちょうど半年間かかった。大学に入ってから一番長く感じた半年間だった。というのは、「日中交流×町おこし@伊豆」の実行は私が想像した以上に複雑で難しかった。ツアー内容を練りに練ってようやく決めたら、お店に NG を出されて、至急対策案をたてたこともあった。現地のお店との交渉は、私たちほとんど経験がないので、日本人のアドバイザーに添削を何回もお願いした。どうしたら参加者が集まるのかも相当苦悩した。できるだけ多くのルートを通じて宣伝したり、知り合いにサークル内で宣伝してもらったりした。何度も「やっぱりだめか」と諦めかけたことがあるが、メンバーの励ましで最後まで頑張れた。そして、この三日間のツアーを実施したあと、すべての汗はかいた甲斐を感じた。何よりも参加者が楽しめたし、伊豆のことを真剣に考え始めた。人生を決めるのは「理由」ではなく、「きっかけ」だと思う。私が日中交流に興味を持ったのは高校時代の留学がきっかけだった。それと同じように、将来参加者の中で、今度の活動がきっかけで、伊豆のために何かしたい、田舎で町おこしをやりたいと思う方もいるかもしれない。すぐに伊豆に大きな経済効果をもたらせるとは思わないが、私たちが行ったことで現地の方々が喜んでくれて、私たち努力に目を留めてくれた方がいればやりがいはあったと思う。この活動にご協力いただいたすべての皆様、本当にありがとうございました。この活動で、私も少し大人になれた気がする。

方璐
（日中学生交流連盟　上智大学）

この活動の魅力は何てすかと質問されたら、私は「日中交流」と「町おこし」の２つだと思います。私たちはせっかく日本に留学しに来ているので、日中友好を深めるためには具体的にとうしたらよいかを考えました。そこで、日本にいる中国人を日本の地方に派遣し、地元の人々と町つくりをしながら彼らに中国を知ってもらい、相互理解を深める活動を考え出しました。この活動は「日中新時代を切り開くコミュニティ」を構築するという日中学生交流連盟の理念にもぴったり合っています。日中交流の活動を企画するのは初めてでした。去年から今年の夏まで、本番を目指して、準備してきましたが、実行段階に移すまでがとても難しかったです。企画や広報、渉外などの面で苦労をし、活動運営の辛さを知りました。しかし、この活動があったからこそ、運営スタッフとして必要な能力を鍛えることができました。ここで得たものは一生の良い思い出になります。この経験をなにらかの形でこれからの大学生活でいかしていきたいと思います。

星野雄三
（アドバイザー　東京大学大学院）

当初、正直僕はメンバーの皆がツアーを最初から最後まで企画・進行ができるかどうか心配に感じておりました。最初は予想通り、日本のシステムー交通・ツアー構成などーの理解不足に加え、そもそも集団でのツアーなど初めて運営するわけですから、何から何まで初めての体験だったと思います。しかし、そのたびメンバーは一つ一つ乗り越えていき、頼りがいのあるメンバーになっていきました。当日もメンバーは楽しみながらも、参加者を喜ばすことを忘れていませんでした。今回のツアーのコンセプトである「共同作業」「参加型」「主体性」は写真コンテストという企画のおかげで、しっかり満たされていたように思います。実際に写真コンテストを通して感じたのは、参加者が伊豆の魅力を発信すべく、主体的に伊豆を観察していたこと。ただの観光で終わらせず、どこをどう映したら面白いか、ということを積極的に考えながら行動していたのが見て取れました。ツアーを通して、実行委員が成長したのは勿論の事、参加者とともに日中交流を果たし、参加者も日本の地域について、能動的に行動してくれ、有意義な企画となりました。

～関係者メッセージ～

飯倉清太さん
（NPO サプライズ　代表理事）

皆さんこんにちは飯倉です。先日は伊豆市へお越し頂きまして本当にありがとうございます。７月３１日の夜皆さんにお会いした時様々な観点から翌日のプランニングをされていたことがとても印象に残っています。実際に修善寺温泉で皆さんが撮影された写真を拝見させて頂き、色々なヒントがあるのだと感じています例えば富士山コーラやわさびの説明書き、踊り子のお酒などが修善寺にあって僕らでは気がつかないことに皆さんが興味をもたれたというは目からウロコでした。その風景を写真という形で残してくれた事にも感謝です。また「伊豆の踊り子」が中国では有名であり、誰でも知っているという事実は本当に衝撃でした、多分天城の人たちも中国で伊豆の踊り子が有名な事をあまり知らないと思います。ぜひぜひ今後の観光に伊豆の踊り子を活用しようと思います。

山田和彦さん
（伊豆市総務部地域づくり課）

この度は、伊豆市でのセミナー開催ありがとうございました。そして、お疲れ様でした。コミュニティFM 放送について、様々な御意見をいただき、感謝しています。また、提言し忘れた事や質問などございましたら、気軽に連絡を頂きたいと思います。私も更に勉強し日本一のコミュニティFM 放送局を創りあげたいと思っています。（笑）学生の皆さんもこれから、大きな壁を超えなくてはならない事などが沢山あるかと思いますが、是非、力を併せ頑張ってください。最後に『FMIS みらいずステーション（87.2MHz）』で伊豆市のステキを発見し、そして、是非、伊豆市に来てください。お待ちしています。

後井隆伸
（国際交流基金日中交流センター）

「心連心：中国高校生長期招へい事業」の担当者として、プログラム卒業生が留学から帰った後も積極的に日中交流に取り組んでほしいと思っていたので、今回の企画に何人かが進んで手を挙げてくれたときは嬉しかったです。しかし、実施までの道のりは決して平坦ではありませんでした。実行委員も、こうした活動の経験がほとんどなく、手探りで準備を進めていました。この点、もう少ししっかりとフォローすべきだったと反省しています。とはいえ、メンバーの熱意と頑張りで、結果的には立派なイベントに仕上げてくれました。本当によくやってくれたと思います。一つ一つの交流活動は小さく、その影響力は微々たるものかもしれませんが、そうした草の根の活動一つ一つが、将来の日中両国の架け橋となる一人一人を育てるのだと信じています。今後も、若い交流の担い手たちの頑張りを期待しています。

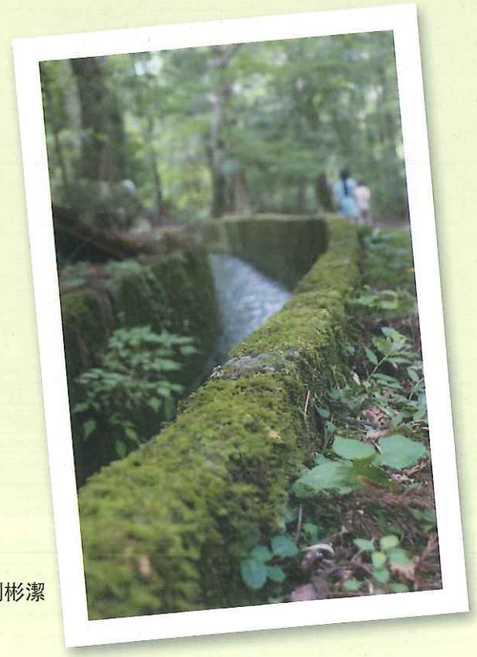
写真コンテスト

今回のツアーの思い出を形として残すため、そして伊豆の魅力を広く発信するため、
ツアーの写真コンテストを行いました。Facebook で今回のツアーの写真コンテストページを作り、
参加者が自分たちで撮った写真を自由にページにアップ。
ツアー終了後、「いいね！」の数が最も多かった 10 枚をここで披露します！！

撮影者：王沁

撮影者：森由香里

撮影者：斉藤勇希



撮影者：劉彬潔

撮影者：張心浄

撮影者：楊潤欣

日中交流活動の実行委員は随時募集しています。
興味のある方はぜひこちらへ。

町おこしプログラム
https://www.facebook.com/matiokosiprogram

留学生の町おこし日記
http://jcsf.jp/wordpress/?page_id=761

日中学生交流連盟
http://jcsf.jp/wordpress/

人人网
http://page.renren.com/601626418
https://www.facebook.com/jcsf.frontier

国際交流基金　日中交流センター
http://www.chinacenter.jp/

【協力協賛一覧】
株式会社 Toiz
伊豆市 地域づくり課

心连心
Heart to Heart

http://www.chinacenter.jp/